

## 日本植物形態学会設立の経緯 ～生命現象探求へ「形」から迫る～

第3代会長 黒岩常祥

(日本女子大学客員研究員/日本学士院会員/東京大学名誉教授)

日本植物形態学会が創立以来30年を迎えたとのこと、真におめでとうございます。学会本部より、学会設立に関係した者の一人として、設立当時の模様を書くようにとのお話がありました。個人的内容も少し含むので恐縮ですが書かせて頂くことにしました。一部記憶が薄れているところがあるかと思えます。ご指摘頂ければ幸いです。

手元にある最も古い形態学の教科書、1958年発行の濱健夫著「植物形態学」の中で、ミトコンドリアはコンドリオゾーム、核小体は仁です。研究者が植物を使う時、ここで見られるように植物細胞の基本を述べ、植物特有の多様な現象に興味を抱き研究を進めるのも一つのあり方でしょう。一方筆者は座右の書として1958年発行の湯浅明著「細胞学」を使ってきました。植物は交配し易いエンドウマメによる遺伝学の研究を基盤に、ゲノムサイズが大きかったこともあり、根端分裂組織を使った染色体の細胞遺伝学的研究が盛んであったように思います。筆者も、細胞・細胞小器官(オルガネラ)の分裂/増殖と遺伝の研究に最適な研究材料として、植物(藻類)を扱ってきました。解析法の基盤に「形態(観る)」が必須でした。我々の古くからの仲間であった植田勝巳先生のことを、野口哲子先生が述べておられます。「植田先生は数回危篤状態になりましたが、目覚められた時に、奥様に何をしていたかを問われると、“電子顕微鏡を見ていた”“暗室で写真を焼いていた”などと答えられたそうです。2006年に研究活動の終了を宣言されましたが、魂は最後まで研究者であり続けられました。」先生は電子顕微鏡の大家でいらっしゃいましたが、先生が残された論文と共に、観ることに魅せられた先生の深い思いが伝わってくる逸話ではないでしょうか。

### 背景:

筆者も形態学的解析をベースにおいた研究に魅せられた一人であろうと思っております。形態学的研究を基盤に研究を推進して来たのは、形を観て発見することが個性でもありますが、その成果に説得力があると思うからです。東大医学部の廣川信隆先生がツァイスの記念講演会の講演で「百聞は一見に如かず」を強調されていましたが、強く同感を覚えました。

高校で結核に罹患し、すべての活動が停止後、回復期に見えた微かな将来に、子供の頃からの遊びの延長として、生物の研究者を夢見ました。研究課題を選択するにあたって、生物に共通性の高い課題として、細胞の分裂/増殖を選びました。予備校の先生に相談すると、その分野としては米国で長らく研究をされ、東大臨海実験所から東京都立大学に移られた団勝磨先生がおられると教えて頂きました。団先生はD・メイジャー先生と、研究材料として細胞が大きく細胞分裂が見易いウニ卵を開発され、使っておられました。今でも先生が黒板に描かれた大きなウニ卵の分裂像が目には浮かんできます。昼夜の授業でも個人的にも先生は、「研究者になるなら、あまり他の人がやらないことをやりなさい」とも言われ、そのためには「研究に適した材料の選択」、「新たな技術の開発」が必要だと言っておられました。また

この頃、実習中に T. ドブジャンスキー先生が見え、「研究の成果を進化的に考察すること」の重要性を語られました。この時の両先生の教えは生涯の研究の基範となりました。しかし 1950 年後半から 1960 年代は分子生物学の黎明期で、ほとんどの学生や先生方は大腸菌、アカパンカビ、酵母など微生物を使って、遺伝子/分子生物学的研究を開始していました。

しかし“形に拘る性格”であったこともあり、卒研では勝手に、動物細胞よりゲノムサイズが大きく、染色体が太く観察し易いタマネギの根端分裂組織の体細胞分裂や、近くの農林高校で培養していたユリの株を頂き減数分裂を、光学顕微鏡と電子顕微鏡で観察をはじめました。それを見かねた他の研究室の先生が、細胞遺伝学的研究をしたいのなら、東京大学理学部植物学教室の遺伝学研究室（田中信徳教授）が良いと教えてくれました。そこで大学院では田中研に移り、染色体が 3 本のキク科植物のクレピスの根端細胞を使って、細胞周期における染色体の複製/動態を、光学顕微鏡オートラジオグラフィと、新たに開発した超高分解能電子顕微鏡オートラジオグラフィ法を使って、細胞遺伝学的に調べました。その結果、分裂周期を通じた染色体 DNA の複製様式を捉えることが出来ました。しかし実験材料として根端分裂組織を使用する不利な点は、細胞分裂が同調しておこらないことです。細胞核内で起きる微細な変化を誘導する物質を、生化学的に同定することは出来ませんでした。そこで細胞核分裂が同調しておこる生物を探し始めたところ、湯浅明先生が真正粘菌には多核の変形体の時期があり、そこでは細胞核分裂が高度に同調化していること、そして実際に粘菌を使われているお茶の水女子大学の太田次郎先生を紹介して下さいました。観察の結果、粘菌では細胞核分裂は 100%同調して起こりました。粘菌は非常に魅力的な材料でしたが、クレピスで成果をまとめ学位を得ました。

大学院修了後、東京都立アイソトープ総合研究所に勤めました。ここでは公務としてヒトの染色体に対する放射線の影響を、X線技師の血液を遣って調べました。幸い異常はありませんでした。公務の後、粘菌を使って電子顕微鏡オートラジオグラフィで RNA 合成を調べている時、ミトコンドリアが電子密度の高い核をもち、活発に RNA 合成をしていることに気付きました。次第に粘菌のミトコンドリアの魅力に引き込まれて行きました。この頃、岡山市の旭川近くの商工会議所で日本電子顕微鏡学会が開催され、東大で 3 年先輩だった研究部の助手をされていた松島久さんと参加しました。岡山の自然の豊さと、ゆったり流れる旭川、遡上する稚鮎の群れ、背景にある城の美しさにすっかり魅了されてしまいました。数ヶ月後、生物科学ニュースに岡山大学の理学部生物学科の「植物形態学」講座（武丸恒雄教授）の助教授の公募が載りました。応募後半年して忘れかけた頃、採用が決まりました。

### 1973-1978 年「植物形態」学に出会う

岡山大学は自然に囲まれ、大学構内も広く、構内を横切って東西に小川が流れており快適な環境でした。理学部生物学科は動物と植物の生理学、形態学の講座と遺伝学の 5 講座があり、大学院は修士課程までしかありませんでした。ここで「植物形態学」(シヨッケイと呼ぶ)講座に所属することになりました。前年まで植物形態学者で、ネジモクなどの海藻研究で知られた猪野俊平教授が定年となられ、キノコを使って形態形成を遺伝学的に研究されていた武丸先生が教授となられたばかりでした。豪華な広い居室を講師/助教授の小生に譲って下さいました。ここで自然に親しみながら粘菌の研究を開始し、今日の研究の原点になる真正粘菌で「ミトコンドリア核(核様体)分裂」を発見しました。最初の学生は日詰雅博さん(キトログリア編集長、愛媛大学名誉教授)、翌年には河野重行さん(メンデル協会会長、東大名誉

教授)ら数名ずつ入って来て、研究は一段と進みました。

4年ほどして大阪大学の神谷宣郎先生の研究室の石上三雄さんが、富山で開催された日本植物学会で小生の発表を聞き、研究室のセミナーに招聘してくれました。この機会に、田澤仁先生をはじめ黒田清子先生、永井玲子先生他、神谷研の多くの皆様の知己を得、現在まで続いています。翌年1977年、定年後、岡崎に建設中の生物科学総合研究機構(現自然科学総合研究機構)基礎生物学研究所に移られていた神谷先生が、「日本細胞生物学会役員会で岡山に来たから」と市内のホテルに呼んで下さり、「君も機器など十分に準備のある研究所へ来ないか」、更に「近くに良い釣り場もありますよ」と誘って頂き、助教授として移りました。講座名は細胞生物学研究系「細胞機構」研究部門でした。

### 1978-1984年「植物形態」は科学研究費の項目にあった

岡崎の研究所に移って暫くして、東京慈恵医科大学におられた新津恒良先生がグループ研究として小さな7-8名ほどのグループ班を組織し、科研費「植物形態」に加えて下さり、この分野の研究者との連携・活動が始まりました。この頃は生物科学における多様性を重視する考えがあったのでしょう。「植物形態」の項目がありました。その後、科研費の研究分野として1985年~1994年は「植物形態・分類学」になりましたが、1993年~2001年には植物が無くなり「生物形態・構造」、更に2016年~2018年までは形態・構造となり、更に2021年までは小区分44040「形態および構造関連」となっています。科研費の項目に多様性が失われるのは、基礎的な研究の発展への入り口が狭くなるようで心配です。

### 1985-1988年「植物形態学会の設立」

こうした科研費の項目から見ても、重要である「植物」の項目が失われることを危惧し、学会創立への動きが始まりました。日本植物学会では学会の前日に関連集会を開いても良いことになっていましたので、形態に興味のある有志が集まり、研究発表会を開催していました。一方前述のように、分子生物学や細胞生物学などの発展とともに、植物形態の分野を無くすか、動物と統合して形態とするということが起きてきました。この頃筆者は基礎生物学研究所から東京大学理学部植物学教室に移ることになり、この際、遺伝学研究室の飯野徹雄先生から、自由に研究をしても良いが、(高等)植物に関わる実習や授業などはやって下さいとのことでした。兼任のためしばらく岡崎と東京を行き来していましたが、東大教養部で、永らく高等植物の組織を使って植物形態学的研究をされてきた原襄先生と相談する機会が増えたこと、慈恵医大の新津恒良先生が植物形態に科研費を申請して下さったこと等から、日本植物形態学会の存在の重要性を認識しはじめ、設立に向け準備を始めました。それまでの植物形態に関するグループとしては、前述のように、1985年頃から日本植物学会で関連集会の一つとして活動してきたものが基盤としてありました。

○日本植物形態学会設立準備委員会(1987年1月10日、岡崎)：

原襄先生、新津恒良先生、植田勝巳先生方と相談し、1987年1月10日に15名で、日本植物形態学会(設立)準備委員会を基礎生物学研究所で開催することになりました(図1)。この学会の立ち上げ時の一連の作業には、会計関係を根本泰行氏、庶務関係を黒岩晴子氏にやって頂

きました。彼らから聞いた話では、集合時間に遅れそうだった堀輝三先生が「豊橋で乗った名鉄名古屋本線の車内を後から前まで走って来た」とのことでした。当時の先生の学会設立にかける意気込みが伝わるような逸話です。

○趣意書と会則（1987年11月26日、筑波）：

その後、原先生を中心に各人がやりとりをし(図2)、先生が1987年10月末までに趣意書(図3)や会則の原案(図4)を整理されました。そして1987年11月に筑波で開催された第52回日本植物学会の関連集会(26日)で、堀先生が責任者となって「日本植物形態学会の設立について」の委員会を行い、趣意書と会則が正式に提案され、承認されました。発起人は86名でした(図3)。

○第一回日本植物形態学会(1988年10月12日、岡山)：

1988年1月1日から日本植物形態学会が発足し、第1回大会は岡山大学で第53回日本植物学会の際に開催され、その時の日本植物学会の学会長は千原光雄先生、大会会長は武丸恒雄先生でした。この第1回大会は、原先生を日本植物形態学会の会長として大学構内で開催することができました。日本植物学会の研究発表プログラムを見ると、大会会長のご配慮か、他の研究集会が岡山大学の外であったのに、日本植物形態学会は10月12日に大学内のB, P会場となっており、他の会議の日程表、関連集会の内容とともに紹介されています(図5a, b)。それからは会員の皆さんの熱意のお陰で、毎年大会が開催され、順調に学会運営が進んできたと思っております。小生の東大での研究室も、以後日本植物形態学会での発表を続けました。

○日本植物形態学会の会員名簿：

1988年2月には日本植物形態学会会員名簿が出来、155名の会員が記載されています。1990年には堀先生が世話人となり科研費を植物形態・分類学の分野で申請しておます(図6)。その後1995年12月31日には252名に増えています(図7)。所属、連絡先の他、研究内容として材料やテーマも記載されており、研究者交流に役立ってきたと思います。

○日本植物形態学会会長の時：

二年ごとに会長が変わり学会設立から7年後(1994年)、事務局が東京慈恵医科大学であった時に、小生が会長に選出されました(図8)。この時、医学や農学系など実学系の学会には多くの賞があるのに、基礎生物(植物)学など「非実学」の学問分野ではありませんでした。教員公募などの応募に際し、賞がある方が有利と聞いていましたが、諸先生方に何うと、植物学分野では学術的視点から、賞の設立に反対する方が多いとの事でした(もっともな意見でもありました)。しかし会長就任後、日本植物形態学会賞等を、河野さんをはじめ多くの先生方と相談して策定しました。第一回の日本形態学会賞は原襄先生、平瀬賞は植田勝巳先生、長船哲斉先生、奨励賞は塚谷裕一先生、藤江誠先生の各氏が受賞されています。今手元にあるPLANT MORPHOLOGY 8, 1996を読むと、先生方の意気込みや内容の重厚さを感じます。この冊子体で、当初から2007年頃まで20年近く、表紙に使われていたイチョウの絵は、田中健治先生のお嬢さんの田中尚子氏に依頼し、デザインして描いて頂いたものです。

この頃は、私は日本植物形態学会だけでなく、日本植物生理学会、そして日本植物学会に

も参加していましたので、こちらでも積極的に賞を作りました。日本植物学会では2003年度庶務幹事の河野さんに細かい点まで全面的に協力して頂きました。日本植物生理学会の賞は、2004年に西村光雄先生と一緒に策定しました。

## 2000-現在 「日本植物形態学会の展望」

○長続き：

ここに至るまでいろいろな研究社会の展開がありましたが、日本植物形態学会が30年も順調に続いていることに驚かされます。やはり研究の根底に、学問として対象を「観て発見する」、「観て確認する」、「観て楽しむ」などのことがあるからでしょう。

○若い学生の発表の場、研究交流の場：

設立の理由にも書いてありますが、学生など未だ研究が十分進展していなかったり、発表に未熟であったりというような状態であっても、一つの練習の場として、まだ経験の浅い若い学生の研究も多く発表させて頂きました。これらの発表が若い方も含めて、その後の研究の発展の基盤となったと確信しております。

○PMは簡単な論文の発表の場：

日本植物形態学会誌のPLANT MORPHOLOGYは年に1回の発行です。しかし、若い学生も我々も、十分に利用させて頂きました。今過去から現在のものまでを眺めると、「役員」「論文」「総説」「学会賞受賞者ミニレビュー」「受賞理由」「日本植物形態学会大会発表要旨」「大会について」「研究技術紹介」「研究室紹介」「研究費情報」「会長挨拶」「事務報告」「会計報告」等があります。またネットでも配信されています。編集委員会の先生方は大変だったと思いますが、20年前に掲載された「研究技術紹介」の内容を見ますと、現在引き続き使われているものも多く、執筆された方々は最先端の技術を使い研究され、それを真摯に紹介してくれていたのだと思います。その他の論文や総説も、また学会賞受賞者ミニレビューを読んでも、それぞれの方の研究に対する真摯さが伝わり、大変気持ちの良いものです。更に最近の研究論文など読むとその質の高さに驚かされます。

○Atlas of Plant Cell Structure の Springer からの出版：

2014年に野口哲子先生が会長の時にSpringerより「Atlas of Plant Cell Structure」(Tetsuko Noguchi・Shigeyuki Kawano・Hirokazu Tsukaya・Sachihiro Matsunaga・Atsushi Sakai・Ichirou Karahara・Yasuko Hayashi Editors)が出版されました(図9)。内容が藻類から高等植物まで広範にわたっており、どの写真も大変美しく、素晴らしいの一言に尽きるものです。今でも時々見て参考にさせて頂いております。

○*Cyanidioschyzon merolae* A New Model Eukaryote for Cell and Organelle Biology の Springer からの出版：

2018年Springerより「*Cyanidioschyzon merolae* A New Model Eukaryote for Cell and Organelle Biology」(Tsuneyoshi Kuroiwa・Shinya Miyagishima・Sachihiro Matsunaga・Naoki Sato・Hisayoshi Nozaki・Kan Tanaka・Osami Misumi Editors)が出版されました(図10)。多様な分野の研究者の支援を得て、細胞・細胞小器官(オルガネラ)の分裂/増殖

と遺伝の研究に、最適な研究材料としてシズンを使い成果を得た内容を纏めた構造生物学や合成生物学にも役立つ本となると自負しています。

○日本植物学会との連携、雑誌「遺伝」、日本植物形態学会誌(Plant Morphology)、そしてそれを基盤に韓国講演など：

2016年に沖縄で開催された日本植物学会で、シンポジウムを河野さんと、河地正伸さんが立案され、講演者の一人に加えて頂きました。その内容は後に生物の科学「遺伝」71, 2017に「微細藻類の多様な魅力：分類、進化、ゲノムから形態、藻類バイオまで」河野重行、広瀬侑、野村真未、加藤美砂子、大田修平、粕山祐一郎、黒岩常祥、河地正伸として紹介され、更に2017年にPlant MorphologyにInvited Reviewの特集としても書かせて頂きました。

今、9月に韓国での講演を頼まれましたが、これらの総説が資料づくりに非常に参考になり、提出資料にもPlant Morphologyからの引用を明記しています。

学会が創設されてから、30年を経て、このように利用できるのは夢のようです。この学会を基盤に、私達も多くの方々と素晴らしい成果を、協調的喜び、楽しみをおして挙げる事ができたと思います。多くの皆さんの研究がこれを基盤に更に発展されることを期待しています。



黒岩様

形態学会 のついで、いよいよ (2週間ほど時期を待たせて) 25日の同封のものを用意しました。

お金の12打合せ (15日) でした。以上黒岩の25日の一休中のご返事、25日、26日、27日、28日、29日、30日、31日、12月1日、2日、3日、4日、5日、6日、7日、8日、9日、10日、11日、12日、13日、14日、15日、16日、17日、18日、19日、20日、21日、22日、23日、24日、25日、26日、27日、28日、29日、30日、31日、1987年10月8日

同封、鉛筆書きの打合せ内容のものを、お送りさせていただきます。

送達の日、今更に20日ほど無理な思い、一応26日、27日、28日、29日、30日、31日、12月1日、2日、3日、4日、5日、6日、7日、8日、9日、10日、11日、12日、13日、14日、15日、16日、17日、18日、19日、20日、21日、22日、23日、24日、25日、26日、27日、28日、29日、30日、31日、1987年10月8日

12月(月) 12時以後

13日(火) 13 - 15:30

14日(水) 10 - 4:40

15日(木) 10 - 1:30

(16日午後 10:15-12:15 12月16日教員研修会) 参加。(本学) への出席(予定) については、

お返しの思案、ご連絡の件、お送りさせていただきます。会議、会合等、ご日程の他、ご都合の連絡は、お送りさせていただきます。

以上、お返しの件。

1987.10.8

原 襄

-----「日本植物形態学会」設立に向けて-----

今日、植物の形態に関する研究は、蛍光顕微鏡を初めとした光学顕微鏡の発達、急速凍結固定法等、新しい電子顕微鏡技術の開発、TVによる映像撮影と画像解析法の発達、細胞培養技術の高度化などによって大きく影響を受け、著しい変貌を遂げようとしております。これらの技術の発達は、従来の観察技術では得ることのできなかった高次形態に関する情報を、動的、かつ定量的に得ることを可能にしました。また遺伝子工学、細胞工学といった技術及び方法論の発達の結果、植物個体や器官発生の構造形成過程を遺伝子の導入によって調べることができまます。植物の分子生物学や生理学が著しく発展すれば、植物の「形態」に関する情報はこれまで以上に必須なものとして要求されるようになりましよう。従いまして、これまでとかく静物的と考えられて来た植物形態学も、新しい内容を付け加え飛躍的發展が期待されているのが、世界的状況と思われまます。

一方、わが国における植物の形態、構造そしてその機能に関連した分野の研究者は、全国の諸機関でさまざまな研究を行なっています。その対象は器官、組織はもとより、細胞、細胞小器官から分子にわたり、分類学、系統学、生理学、生態学、発生学、遺伝学などあらゆる分野に関連を持っています。技術的にも光学顕微鏡法、電子顕微鏡法、さらには生化学的方法を用い、形態形成、発生、分裂、運動、刺激受容等、植物特有の現象から生物に普遍的な現象に至るまで、基礎的な研究を推進しています。

しかしながら、これらの植物形態学に関連した研究者は、新しい技術や思考の流れを積極的に論議し、実質的な相互の交流を行なう適当な場を持っていません。総合学会的な性格を持つ日本植物学会がその唯一の場と思われまますが、その中だけではこれからの植物形態学の発展に対処し、これを推進するための実効ある交流を図ることは不十分な状況にあります。

私ども発起人一同は、このような状況にある植物形態学の研究者相互の交流を図り、実

質的な植物形態学推進のための核となるような場をつくって、その一層の発展を期し、併せて研究者間の親睦を深める必要性を痛感して参りました。従来、日本植物学会の関連集會として、植物形態学会、植物細胞生物研究会、微細構造談話会があり、それぞれ固有の活動をして参りましたが、昭和60年の植物形態学会の集會を足掛りとして、私ども発起人が参集、協議し、これらを総合的に一つにまとめ、「日本植物形態学会」を設立しようという結論となりました。

「日本植物形態学会」設立の趣旨を充分にお汲み取り頂き、新しい植物形態学の発展に向けて、学会へのご参加、ご協力を頂きたく、宜しくお願い申し上げます。

発起人一同

- |      |       |       |       |      |       |      |
|------|-------|-------|-------|------|-------|------|
| 秋山 優 | 石川依久子 | 伊藤道夫  | 井上 勲  | 井上 寛 | 今市涼子  | 上木勝司 |
| 植田勝巳 | 植田邦彦  | 植田利喜造 | 内海俊策  | 江原友子 | 大隅正子  | 太田敬久 |
| 岡村はた | 長船哲斉  | 小野宗爾  | 笠原基知治 | 加藤雅啓 | 金子堯子  | 上條明雄 |
| 河野重行 | 北川尚史  | 黒岩常祥  | 小林幹夫  | 犀川政稔 | 堺 弘介  | 坂口修一 |
| 佐藤七郎 | 佐藤利幸  | 三戸信人  | 島袋敬一  | 菅井道三 | 杉原美德  | 鈴木孝仁 |
| 鈴木三男 | 関 太郎  | 世羅敬哉  | 相馬研吾  | 相馬早苗 | 高相徳志郎 | 高尾昭夫 |
| 高尾静代 | 高橋正道  | 竹久 慎  | 武丸桓雄  | 田中一朗 | 田中健治  | 田中陸莊 |
| 角田修次 | 中沢信午  | 長島秀行  | 長田敏行  | 中田政司 | 中村宗一  | 新津恒良 |
| 新居直祐 | 西尾康三  | 西野栄正  | 根平邦人  | 根本泰行 | 野口哲子  | 著本春樹 |
| 原 稟  | 馬場三吾  | 日詰雅博  | 平野 正  | 広川秀夫 | 福田泰二  | 藤田哲夫 |
| 宝月岱造 | 星野卓二  | 堀 輝三  | 増田恭次郎 | 松島 久 | 三木 子  | 三田高志 |
| 宮川 勇 | 宮田町子  | 宮村新一  | 村上 悟  | 矢沢静江 | 山田義男  | 吉田 治 |
| 吉田吉男 | 和田アイ子 |       |       |      |       |      |

図3 日本植物形態学会 趣意書

## 日本植物形態学会会則

### 総則

- 第1条 本会は日本植物形態学会 (The Japanese Society of Plant Morphology) という。
- 第2条 本会は植物形態学の発展と普及を図り、あわせて会員相互の親睦を深めるを目的とする。
- 第3条 本会は前条の目的を達成するために会報等の出版物の刊行、講演会など、そのほか必要と思われれる事業を行なう。

### 会員

- 第4条 本会の会員は次の2種とする：通常会員・団体会員。
- 第5条 通常会員とは所定の会費を納める者をいう。
- 第6条 団体会員とは所定の会費を納める団体をいう。ただし、団体会員は本会役員の出選・被選出にかかわる権利を持たない。また、第20条に定める会員の権利のうち、本会の刊行物の配布にかかわる権利のみを有する。

### 役員

- 第7条 本会には次の役員を置く：会長1名・幹事若干名・評議員若干名・編集委員長1名・編集委員若干名・会計監査1名。
- 第8条 役員は会員の中から選出し任期は2年とする。
- 第9条 会長は全会員の投票により就任の前年度中に選出される。その際評議員は若干名の候補者を推薦することができる。会長は引き続き3期選出されることはできない。
- 第10条 評議員は全会員の投票によって選出される。評議員は引き続き3期選出されることができない。なお会長および会計監査は評議員を兼任することができない。
- 第11条 幹事・編集委員長はいずれも会長が委嘱する。会計監査は会長が評議員会にはかり、委嘱する。編集委員は編集委員長が選出評議員会にはかり、会長がこれを委嘱する。
- 第12条 会長は会務の全体を統括する。編集委員長は会報の編集に関する一切の責任を負う。幹事は庶務・会計・選挙管理など日常の会務を行なう。会計監査は会計を監査する。
- 第13条 評議員会は評議員会を構成する。評議員会は会長の諮問の範囲で本会の要務を審議する。
- 第14条 編集委員会は編集委員会を構成する。編集委員会は編集委員長の諮問の範囲で、会報の編集に関する要務を審議する。
- 第15条 会長は必要に応じて特定の委員会を設けることができる。委員会の任務、委員の選出方法・任期等は評議員会が定める。

### 会計・会費

- 第16条 本会の会計年度は1月に始まり12月に終わる。
- 第17条 通常会員の会費は年1000円とする。団体会員の会費は1口年10000円とする。

### 総会・講演会等

- 第18条 本会は原則として毎年1回総会を開き、会務を協議し議決する。なお会長が必要と認めた場合に臨時総会を開くことができる。
- 第19条 本会は総会の時、研究発表及び講演会などを行なう。このため臨時の役員を置くことができる。臨時の役員は会長が委嘱する。

### 会員の権利・義務

- 第20条 会員は会合に出席して講演をし、議事に参加し、会報に投稿することができる。また定期刊行の会報は無料で配布を受ける。ただし、その他の刊行物の配布方法は評議員会の議を経て決定される。
- 第21条 会員が退会しようとするときは、そのことを本会に通知しなければならぬ。ただし既に納めた会費は一切これを返さない。通常会員および団体会員が会費を滞納したときは直ちに前条の権利は停止され、1か年以上滞納したときは除名されることがある。

### 会則変更

- 第22条 本会の会則を変更するには総会または臨時総会でこれを協議し、出席会員の3分の2以上の同意を得なければならない。

### 付則

- この会則は昭和63年1月1日から実施する。
- 昭和63年1月1日からの会長と評議員については選挙方法を昭和62年に筑波で開催される「日本植物形態学会」設立総会で決定する。
- 最初の評議員のうち、別に定める申し合わせにより約半数は引き続き2期選出されることが出来ない。この付則 2.3は昭和65年1月1日をもって、申し合わせ3とともに削除する。

### 申し合わせ

- 役員の定数は当分下記の通りとする。  
会長 1、評議員10、幹事 2 (庶務、会計)、編集委員長 1、編集委員 2、会計監査 1。
- 会長の選挙は単記、評議員の選挙は10名連記で、全会員の郵送による無記名投票によっておこなう。
- 最初の評議員をアイウエオ順にならべて番号を付し、偶数番号の評議員は引き続き2期選出されることができない。

図5a 第1回日本植物形態学会 開催 岡山

# 日本植物学会第53回大会 研究発表プログラム

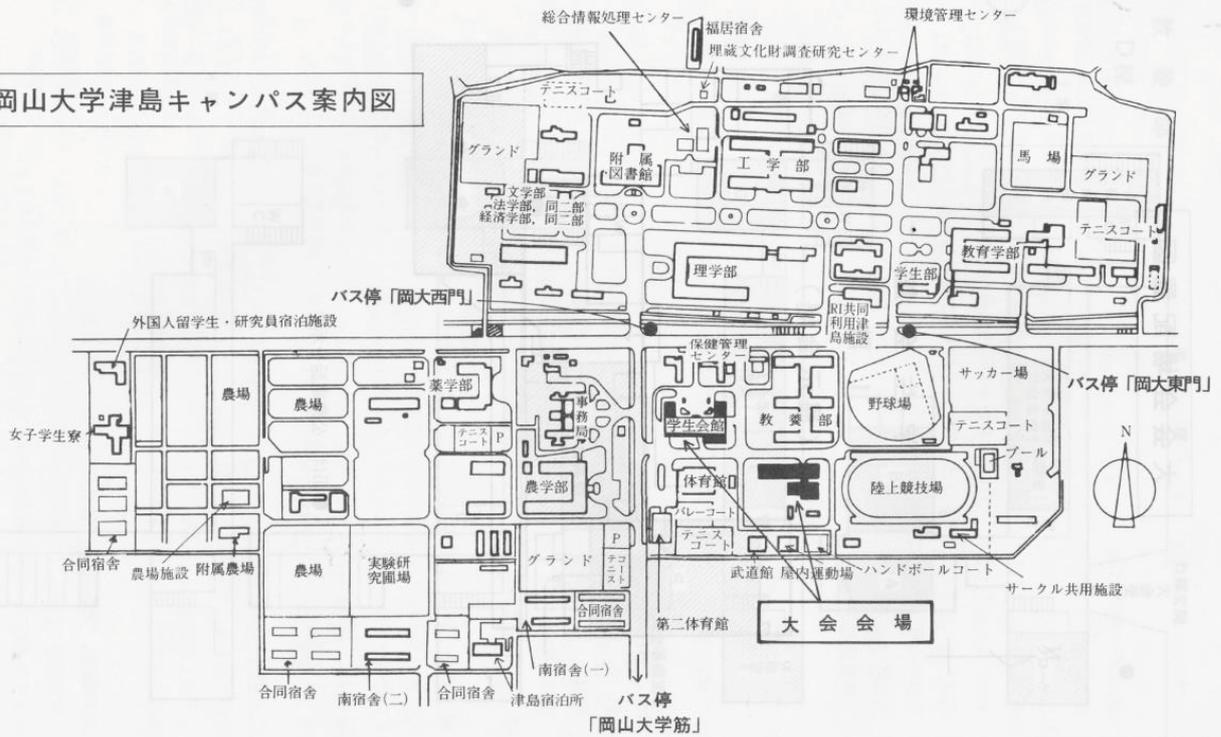
(岡山 1988)

学芸会長 千原光雄  
大会会長 武丸恒雄

会期：10月13日～10月15日

会場：岡山大学 教養部・学生会館

岡山大学津島キャンパス案内図









平成5年11月19日

日本植物形態学会  
会 員 各 位

〒182 東京都調布市国領町8-3-1  
東京慈恵会医科大学  
生物学教室内  
日本植物形態学会

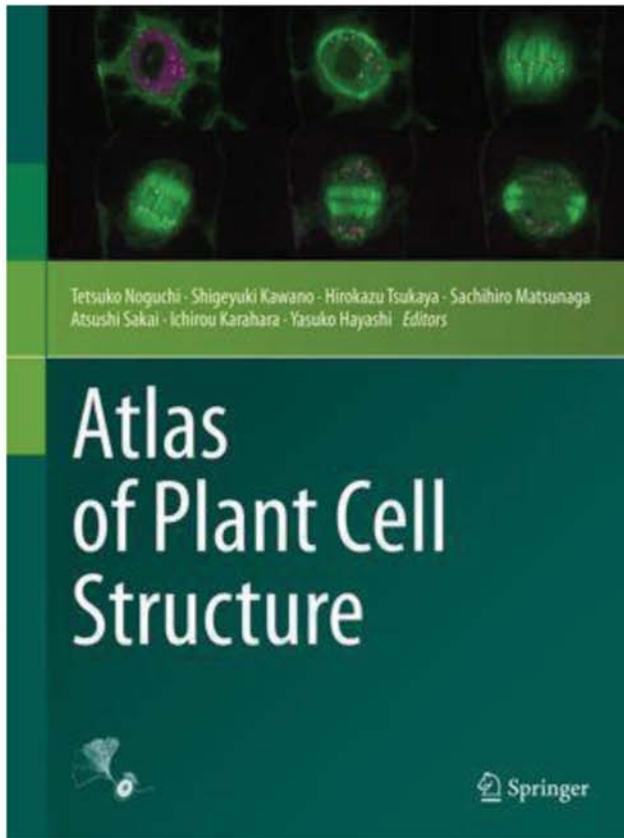
### 日本植物形態学会役員改選について

本学会も設立して6年を経過し、学会誌も本年からNo2を発行することになりました。

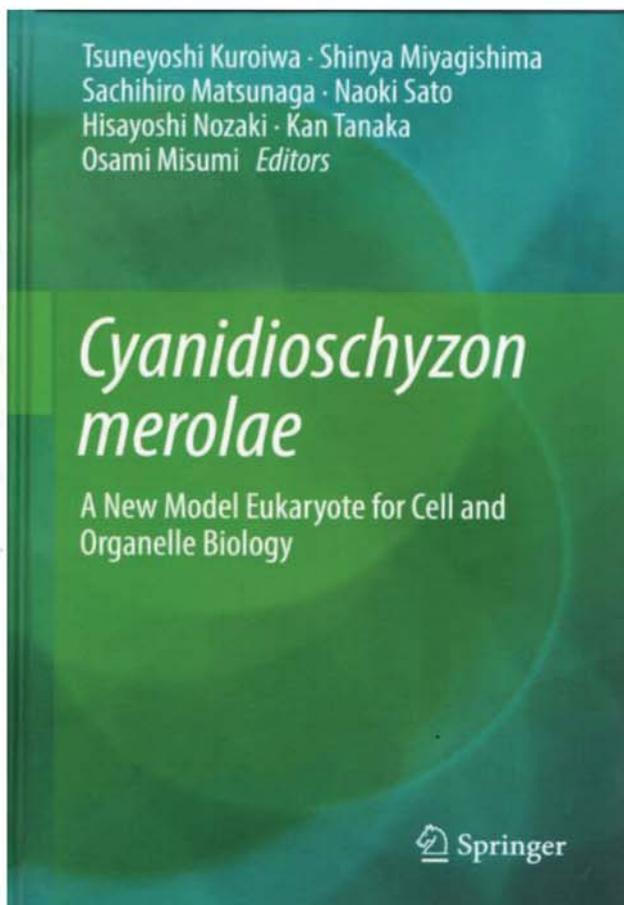
このたび、本学会会則第9条および10条により、次期会長（平成6年1月1日～平成7年12月31日）と評議員（会長と任期は同じ）の選挙をおこないます。次の要領にしたがって全会員のご投票をお願いいたします。

#### 記

1. 会長選挙：会則第9条の規定により、評議員によりつぎの3名の方が候補者として推薦されました。  
〔黒岩 常祥 ・ 福田 泰二 ・ 堀 輝三〕（敬称略）  
ただし、これ以外の方を投票されても、もちろん有効です。
2. 評議員選挙：会則第10条により、つぎの現評議員は引き続き3期選出はできません。  
大隅 正子、長船 哲斉、三戸 信人、田中 健治（敬称略）  
上記以外の会員（同封の会員名簿参照）にご投票ください。  
（10名連記）
3. 会長候補者と評議員候補者に同一名を記入しても有効です。
4. 評議員候補者として同一名を連記したときは、1票だけを有効とし、以下は無効票とします。10名連記に10名未満しか記入しないときは、記入しない欄は白票として取り扱います。
5. 投票は同封の所定用紙にご記入ください。それ以外の用紙での投票は、無効となります。
6. 投票用紙は所定の欄にのり付けし、同封の封筒に入れ、密封の上、封筒に記名して送付してください。  
（平成5年12月15日（水）消印まで有効）
7. 開票は平成5年12月18日13時から、東京慈恵会医科大学国領校で、別に選定した立会人のもとで行います。会員は、開票に立ち合うことができます。



☒ 9 Atlas of Plant Cell Structure  
Springer



☒ 10 Cyanidioschyzon merolae  
A New Model Eukaryote for  
Cell and Organelle Biology  
Springer